

酒屋前遺跡

——埋蔵文化財発掘調査報告書——

1983.3

長野県飯田市

酒屋前遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983.3

長野県飯田市

序

伊那谷の中核としての飯田市は、産業・経済面の充実施策の一つとして、広く県内外の優良企業の誘致を実施しています。そうした状況の中で、愛知県高浜市に本社のあるエヌ・ティー・ツール株式会社の工場が、中央道飯田インターチェンジ南方の大東地籍に建設されることになりました。しかし、その一帯が埋蔵文化財包蔵地であるため、発掘調査を行い記録保存いたしました。

今回の調査により、いくつかの新事実が発見されましたが、特に中世の柱穴群は興味深いものです。

報告書が出版されるにあたり、文化財保護の意義を深く思うとともに、冬期の悪条件の中で終始ご熱心に調査にあたられた、佐藤調査団長はじめ関係各位のご努力に深く感謝し、お礼申し上げる次第であります。

昭和58年3月

飯田市長

松澤太郎

例　　言

1. 本書は長野県飯田市大瀬木酒屋前遺跡における昭和47年度中央道用地内遺跡発掘に続く追跡東側の工場建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集・執筆は佐藤が担当した。
3. 遺構実測図作成・遺物の作成は佐藤・牧内が、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
4. 遺構実測図のうちピット内または横の数字は床面からの深さをcmで示し、縮尺は図示してある。
5. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目　　次

序	2
例　　言	3
目　　次	3
挿図目次	4
I　環　　境	5
II　発掘調査経過	7
III　発掘調査結果	9
1. 住居址	10
2. 方形周溝墓	13
3. 柱穴群	15
4. 土坑・溝址	19
5. 遺構外遺物	21
IV　ま　と　め	22
図版　I　遺跡　II　調査グリッド　III　遺構・遺物　IV　発掘スナップ	25
調査組織	37
おわりに	38

挿 図 目 次

図1	酒屋前遺跡地形・位置図及び周辺関連遺跡 (1 : 50,000)	5
図2	酒屋前遺跡7列グリッド土層断面図	9
図3	" 1列グリッド土層断面図	10
図4	" 遺構分布図	11
図5	" 1号住居址、柱穴群I	12
図6	" 2号住居址	12
図7	" 2号住居址出土遺物 (1 : 3)	13
図8	" 方形周溝墓I	14
図9	" 方形周溝墓I・遺構外出土遺物 (1 : 3)	15
図10	" 柱穴群II	15
図11	" 柱穴群III	16
図12	" 柱穴群IV・V	17
図13	" 柱穴群VI、土坑4号・5号	18
図14	" 柱穴群VI	19
図15	" 出土中世遺物 (1 : 3)	20
図16	" 土坑6号、溝址	21

I 環 境

酒屋前遺跡は長野県飯田市大瀬木316番地他に所在する。

大瀬木地区は、昭和31年飯田市合併前は伊賀良村大瀬木であった。伊賀良地区は飯田市街地の南々西にあって、木曾山脈の前山、笠松山(1271m)、鳩打峰(1173m)、高鳥屋山(1397m)の東山麓に位置し、北の飯田松川と南の茂都川(久米川の支流)の強い押し出しによって広大な扇状地が発達し、伊賀良地区的中央部の大部分がこの扇状地にあるといえよう。この扇状地の中央部に大瀬木があり、遺跡はその東端部近くにある。

酒屋前遺跡は中央道東側に沿う道路を飯田インターチェンジ入口より南約600mの地域で、中央道道路敷を含めた東西250m、南北50~150mの範囲にある。南は新川の緩い傾斜をもつ比高差10mの侵蝕谷となり、北は用水路と小さな凹地をなすを境にして滝沢井尻遺跡となる。北の凹地と南の侵蝕谷の間に舌状に広がる台地上に立地し、西の上段で標高553m、東の下段で540m、中心部で545mと比高差13mを測り、中央道路線東側の現地目は僅かな畠を除き、段々の水田となっている。

酒屋前遺跡は昭和47年度中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査では、その報告書「飯田地内その2」による発掘調査された遺構には住居址16軒(縄文中期3・後期1、弥生後期8、中世4)、竪穴式遺構1、柱穴群2、土坑群5他等があり、遺物では弥生後期前半の東海地方の寄道式の壺、器台、浅鉢は注目されるものがあり、当地方の弥生後期の好資料の出土をみている。中世では山茶碗、中津川窯産の大甕片等があ



1. 酒屋前遺跡 2. 大東道路 3. 滝沢井尻道路 4. 小畠外・辻垣外道路 5. 上の金谷道路 6. 六反田道路 7. 中島平道路
8. 宮ノ先道路・下ノ城城跡 9. 弟岡城跡 10. 松尾城跡 11. 南ノ原道路 12. 猿小場道路 13. 嶋ヶ嶽八幡社 14. 桜山城跡

図1 酒屋前遺跡地形・位置図及び周辺関連遺跡 (1 : 50,000)

り、鎌倉末から室町初頭のものである。

中央道遺跡調査でみると、南に隣接する大東遺跡では弥生後期住居址2軒、中世前半住居址2軒と中世土坑群等が発掘調査されている。北に隣接する滝沢井尻遺跡では、住居址6軒（縄文中期後半3・弥生後期1・平安時代1・中世1）、柱穴群1、土坑22、方形周溝墓1基が調査され、特に方形周溝墓は弥生後期座光寺原期とみられ、その主体部より鉄劍2口の出土をみ、当地方最古のものとして注目される。

滝沢井尻の北には小垣外・辻垣外遺跡がある。ここは飯田インター チェンジの位置にあって、調査の結果、縄文前期末住居址4、縄文中期後半住居址4、縄文後期遺構3、平安時代住居址2、中世住居址11、柱穴群1の他各時代にわたる土坑111が発掘調査されている。特に縄文前期末の遺物、縄文後期の遺物は注目され、中世建造物と遺物は注意すべきものである。

遺跡の東800mの新川とその支流アマツラ沢の合流地点の中島平遺跡は昭和51年度農業構造改良事業に伴う調査で住居址21軒（縄文時代早期末1・前期末1、弥生時代後期15、古墳時代2、中世2）と柱列址1、土坑57が発掘調査され多くの好資料を得、縄文草創期の有舌ポイントの出土をみている。中島平の南東の一段高位にある宮ノ先遺跡は昭和52年度発掘調査で弥生後期住居址2軒、方形周溝墓3基、中世遺構群2、土坑13を調査している。また、ここには下ノ城城跡がある。

酒屋前遺跡を中心とした弥生後期集落の存在と出土遺物の好資料をもち注目されている。中世においては鎌倉時代伊賀良庄地頭は北条時政であり、時政以後北条江馬氏が代々それを繼いでいる。江馬氏の地頭代四条金吾は殿岡に居を構えたことは「日連聖人御遺文」に収められているが、とのおかの位置について現在の殿岡かははっきりしない。北条氏滅亡後伊賀良庄地頭は小笠原氏となり、その配下の武将を伊賀良の要所に置き、その一つが下ノ城との伝承がある。

15世紀中頃、応仁・文明の大乱にはじまる動乱期に地方の諸族は城を構え、その有力家臣は支城を築くようになる。信濃守護職小笠原氏は松尾城・鈴岡城を築き、その支城が各地にみられる。伊賀良地区には下ノ城・桜山城跡があり、隣接する山本地区には久米ヶ城・西平城・山城跡等がある。長姫高校用地内猿小場遺跡発掘調査では中世住居址16軒と溝址が発見され、青磁・山茶碗等の中世前半の遺物の出土をみている。松尾南の原遺跡発掘調査では松尾小笠原に関連する屋敷跡と薬研堀が調査され中世後半の天目茶碗・茶臼の出土をみて注目されている。飯田市松尾鳩ヶ嶺八幡社御神体銘文に弘安11年（1288）に八幡社が勧請完了し、神像ができあがったとある。

酒屋前遺跡と周辺の関連遺跡をみると弥生時代後期・中世の遺構と遺物には注目すべきが多くみられる。

II 発掘調査経過

酒屋前遺跡は昭和47年度中央道路線内の発掘調査が行なわれ、その報告が「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一飯田地内その2 昭和47年度」に記載されており、主要遺跡として注目された。中央道発掘調査区域外、東側の水田地帯を中心とした地域に、昭和57年度飯田市工場誘致により、エヌテュールKKの工場建設が決定し、工事前に飯田市が埋蔵文化財発掘調査を行なったのが本次調査である。

発掘調査は昭和57年12月23日より1月20日までの延20日にわたって行なわれた。

調査は、中央部をI区・東西方向の道を隔てた南側をII区・井水北をIII区とし、2m×2mのグリッドを、I区では東西方向に7列、南北に3列を水田の畦方向にとり、II区では2か所に、III区では十字に設定し、遺構検出部を拡張することにした。

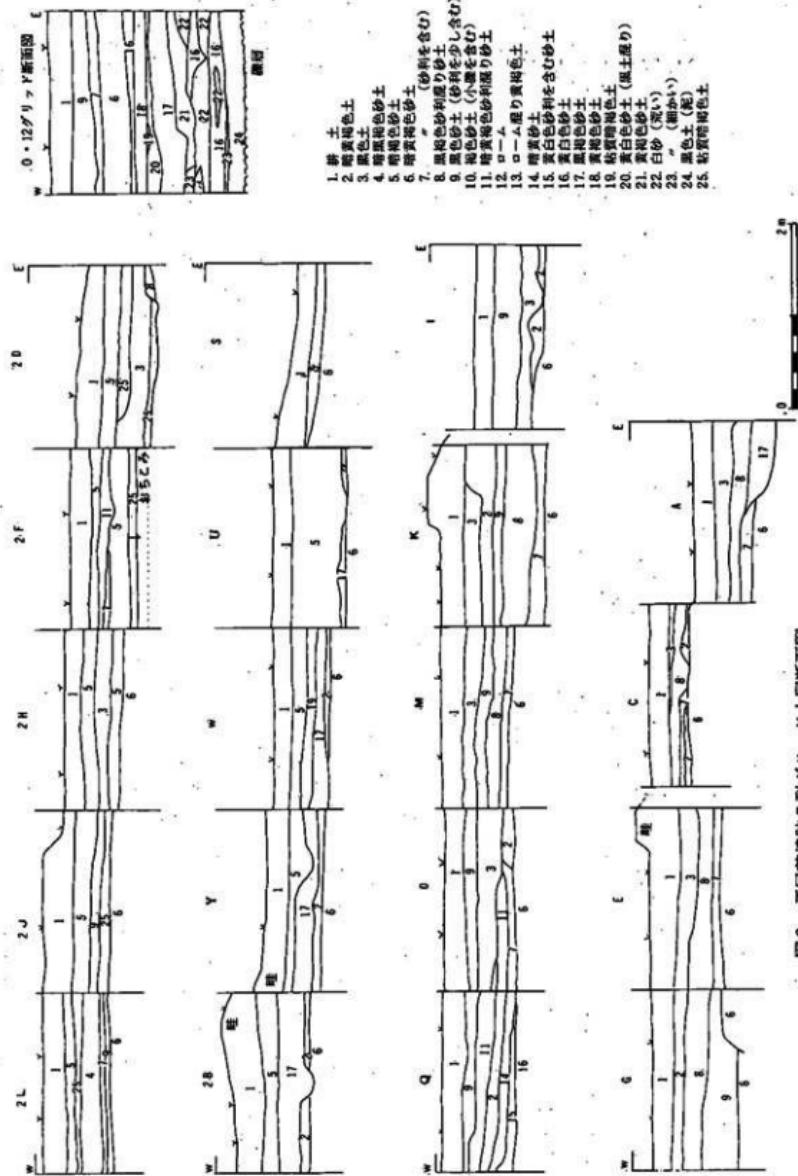
I区の中央部から南は新川の旧流路を示す畦跡があり、調査区全面に氾濫堆積があり、砂層の広範囲に遺構が検出され、II区は水田造成によって上段面は削られ、埋めたられた下段面の深い所に遺構が検出されており、小型重機によって遺構検出個所の表土排除し、調査を行なった。III区はローム層をみると全面にわたって深い天地替しが行なわれており、調査の見込はなくなっていた。調査を実施した面積は3000m²にわたっている。

発掘調査日誌

- 12月23日（くもり・小雨） 器材運搬・テント設営、水田畦方向に1列グリッド50mに設定する。
- 12月24日（晴） 1グリッド調査、東西方向に1・7列を設定調査、A～G 7グリッドに周溝とみるを検出。
- 12月25日（晴・朝凍る）周溝の輪郭の1部調査、前日に続くグリッド調査。23・25グリッドに柱穴を認め、山茶碗の出土をみる。1列土層調査、25列グリッド設定調査。
- 12月26日（くもり・小雨）12列・19列グリッド設定調査、柱穴の多くを検出。グリッド調査個所を測量。
- 12月27日（晴）12列・19列調査、柱穴群を検出、グリッド個所測量。
- 12月28日（晴）I調査区南西上段面に3列グリッド設定調査、遺構とみるは北に傾斜する旧流路となる。7列土層調査。
- 12月29日より1月3日まで年末・年始休み
- 1月4日（晴）III調査区グリッド設定、調査。ローム層であるが、全面に深い天地替しが行われており調査中止する。グリッド位置測量。水田畦ブロックはずし。II調査区グリッド設定、調査。1号住居址、柱穴群Iとみるを検出。柱穴群IIを検出、排土作業。
- 1月5日（くもり・雨）柱穴群II調査、ミニバッックホーン来る。1号住居址の盛土排除。続いてI調査区北側の遺構群の表土排除にかかる。1号住居址プラン検出。
- 1月6日（くもり）1号住居址・柱穴群I・II完掘、写真、測量。小型重機排土作業、柱穴群IVの調査にかかる。
- 1月7日（くもり・雨）柱穴群IV調査、小型重機排土作業。
- 1月8日（雨）作業不能。
- 1月9日（晴・寒い）柱穴群IV掘上げ、測量にかかる。小型重機排土作業、その後を調査。

- 1月10日（晴）柱穴群IV測量。柱穴群Vを検出。重機 I区北側全面の排土を終え、周溝基とみる全面の排土にかかる。
- 1月11日（晴）柱穴群Vの調査。重機排土。遺構写真撮影。
- 1月12日（晴）柱穴群VI調査。VI・VII号を検出。柱穴多し。重機予定地内排土を終える。
- 1月13日（くもり）柱穴群V～VIIを掘上げ、写真撮影、測量にかかる。周溝の北、東溝の検出にかかる。
- 1月14日（晴・凍る）方形周溝基となり、周溝調査。規模大となる。柱穴群IIIの調査にかかる。柱穴群V・VIの測量。
- 1月15日（晴）休み
- 1月16日（晴・終日寒い）方形周溝基調査。砂の流れ込みがあり、周溝検出困難の所があるが大体のプランをみる。東周溝にかかって平安期の2号住居址を検出する。
- 1月17日（くもり・晴）方形周溝基周溝の土層調査、2号住居址完掘。写真撮影、測量。南周溝の南側に住居址とみる落ちこみあり調査。
- 1月18日（雪・雨）調査不能
- 1月19日（晴・くもり）方形周溝基周溝掘り上げ、主体部発見。写真撮影、測量にかかる。2号住居址カマドたち割調査。前日の住居址とみた落ちこみは氾濫の流路となって消える。方形周溝基主体部検出、掘り上げ。柱穴群IIIを完掘測量。
- 1月20日（朝小雪・晴）方形周溝基、柱穴群III写真撮影、器材・テントを撤収する。方形周溝基測量、遺構分布測量を終え現場作業を終わる。

図2 滅屋前遺跡7列グリッド土層断面図



III 発掘調査結果

遺跡は舌状台地の先端部近くにあり、南は新川の緩い谷に面す立地にあって、調査にあたっては中央道用地内調査に引き続き弥生後期の集落址の検出、多量の遺物の出土が予想された。しかし調査結果、台地中央部を西から南東に新川の旧流路の砂礫層があり、調査区域の大半にわたって氾濫堆積の砂層であり、ローム層のみられたのはI調査区の南。

西の高所の1部と北東の1グリッド、III調査区である。グリッド土層断面図(図2・3)にみるとようにグリッド毎の土層は異なり、氾濫の状態を示している。

遺構は暗黄褐色砂土に掘りこまれ、弥生後期・平安時代・中世遺構は数次にわたる氾濫堆積で埋まり、平安時代窓穴住居址覆土は堅い黒褐色砂利混の砂土で埋まる状態であった。このため遺構検出は苦労を重ね、また見落の遺構のあったものと思われる。

酒屋前遺跡において本次発掘調査された遺構は次のようである。

1. 住居址 2軒
(弥生時代後期1
平安時代1)
2. 方形周溝墓 1基
(弥生時代後期)
3. 中世柱穴群 7
4. 土坑 6
5. 溝址 1

1. 住居址

1号住居址(図5)

II調査区中央の南端の地表下68cmに発見され、南北4m×東西4.4mの隅丸方形の暗黄褐色砂土に10cm前後掘りこむ窓穴住居址である。覆土

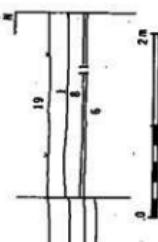
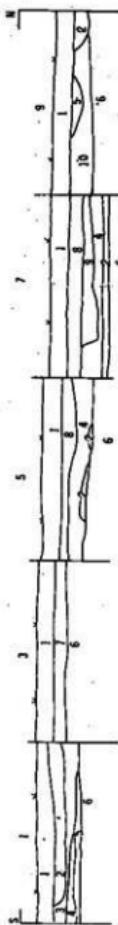
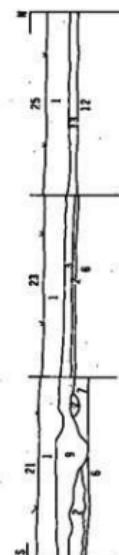


図3 1列グリッド土層断面図

1. 黄褐色砂利混り砂土
2. 黄褐色砂土
3. 黑色土
4. 黑褐色砂土
5. 黑褐色砂土
6. 黑褐色砂土
7. 前浜褐色砂土
8. 黒褐色砂利混り砂土
9. 黑色土 (少しある)
10. 黑褐色砂利混り砂土
11. 黑褐色砂利混り砂土
12. ローム
13. ローム混り黄褐色土
14. 前浜褐色砂土 (少しある)



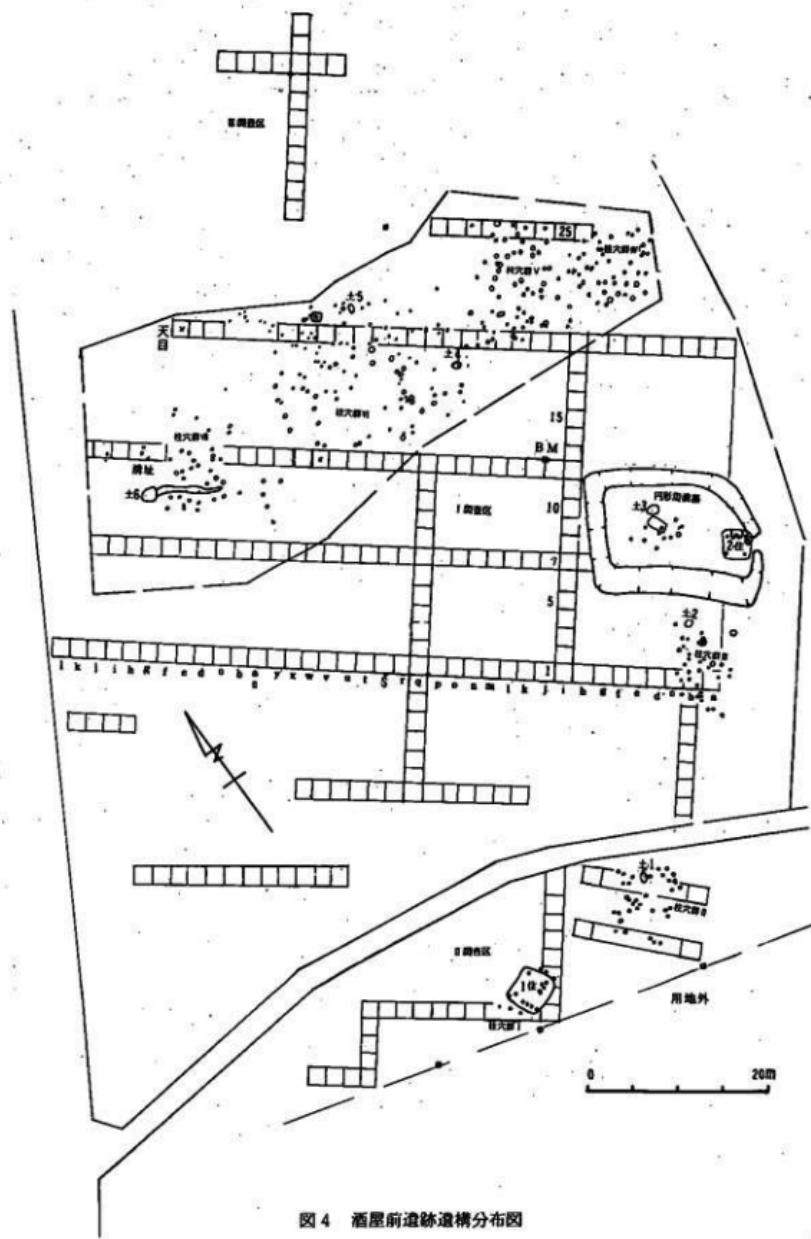


図4 酒屋前遺跡遺構分布図

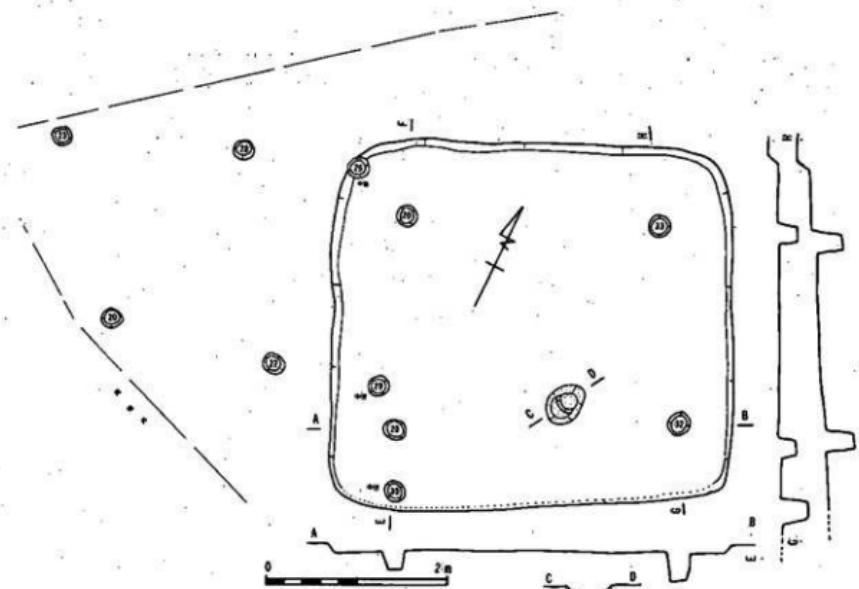


図5 酒屋前遺跡1号住居址、柱穴群I

は暗黒色砂土で埋まり、南壁は水田造成によって削りとられていた。床面は堅く、主柱穴4つが整った配置にあり、中世柱穴群Iの柱穴3つが住居址内に掘りこまれている。炉址は、南側柱穴間のほぼ中間部にあり浅い掘りこみの地床炉である。遺物は弥生後期土器の小破片のみである。

2号住居址（図6）

方形周溝墓Iの陸橋部と東周溝に僅かにかゝって西側にある。堅い砂利混りの黒褐色砂土の中に須恵器杯の完形を発見し、住居址の存在を知ったものである。南北 3.15 × 東西 3.15 m の隅丸方形をなし、暗黄褐色砂土に30cm余掘りこむ平安時代の竪穴住居址で、覆土は砂利混りの黒

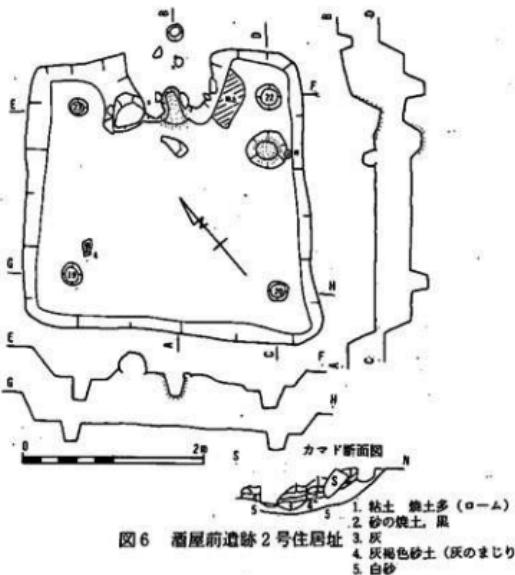


図6 酒屋前遺跡2号住居址
1. 粘土、燒土多(ローム)
2. 砂の焼土、風
3. 灰
4. 灰褐色砂土(灰のまじり)
5. 白砂

褐色砂土で埋まる。床面は堅く、主柱穴は4こ、カマドは北壁につき、石をいくつか入れ、ロームで堅めている。東壁ぎわに灰瘤の掘りこみがつく。

遺物(図7)は少なく、土師器の壺(1・4)と須恵器の杯(2)、砥石の出土をみている。土師器1の壺は口径20.5cm、長胴、底部を欠き、外面は荒いカキ目、口縁部内面には横位のカキ目が施されており、内面に炭化物の付着が多い。3の壺は口縁部を欠く。赤褐色を呈し、カキ目が施されたあとロクロ整形がなされている。壺ともみられるが内面に炭化物の付着がみられ、壺とみたものである。2の杯は堅い覆土に発見されたため口縁部の1部を欠いたものである。高さ4.5cm、口径13.5cm、糸切底、胎土には大きい長石粒を多く含み地方産とみられる。4の砥石は砂岩製、2面が使用されている。

2. 方形周溝墓

方形周溝墓1号(図8)

I調査区東端中央部に発見され、東西19m×南北13.5mの隅丸方形の範囲に幅1.6m~3m、深さ70cm~90cmの溝をめぐらし、東側中央部に幅1.8mの陸橋をもつ。主体部は中心より西に寄ってあり、南北195cm×東西120cm、深さ25cmの隅丸長方形の土壙で、主軸方向N20°Wを指す。北30cmに土坑3号がある。南北102cm×東西118cm、深さ19cmの隅丸方形をなし、主軸方向N70°Wのものであり、主体部の一つか、他の土坑かははっきりいえない。また主体部周辺に小柱穴群があり、中世のものとみられる。

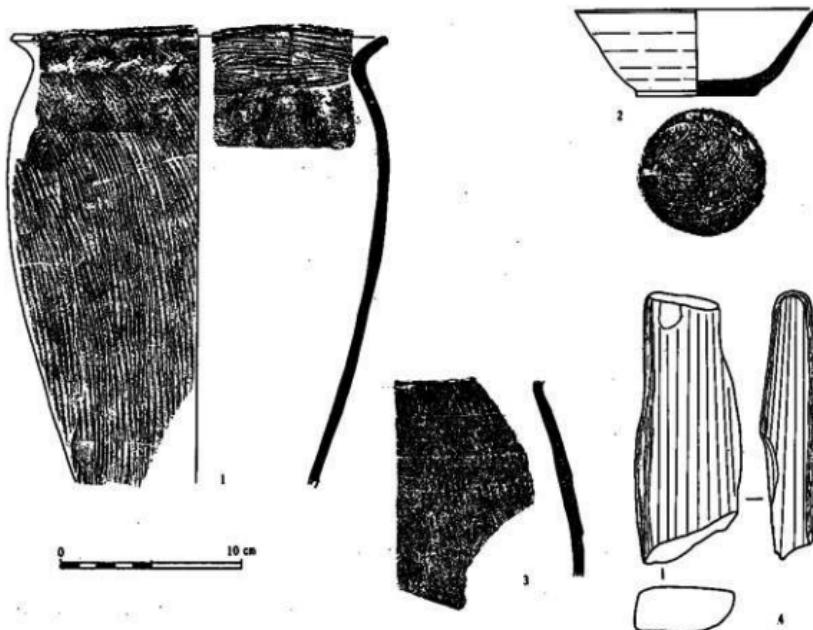


図7 酒屋前遺跡2号住居址出土遺物(1:3)

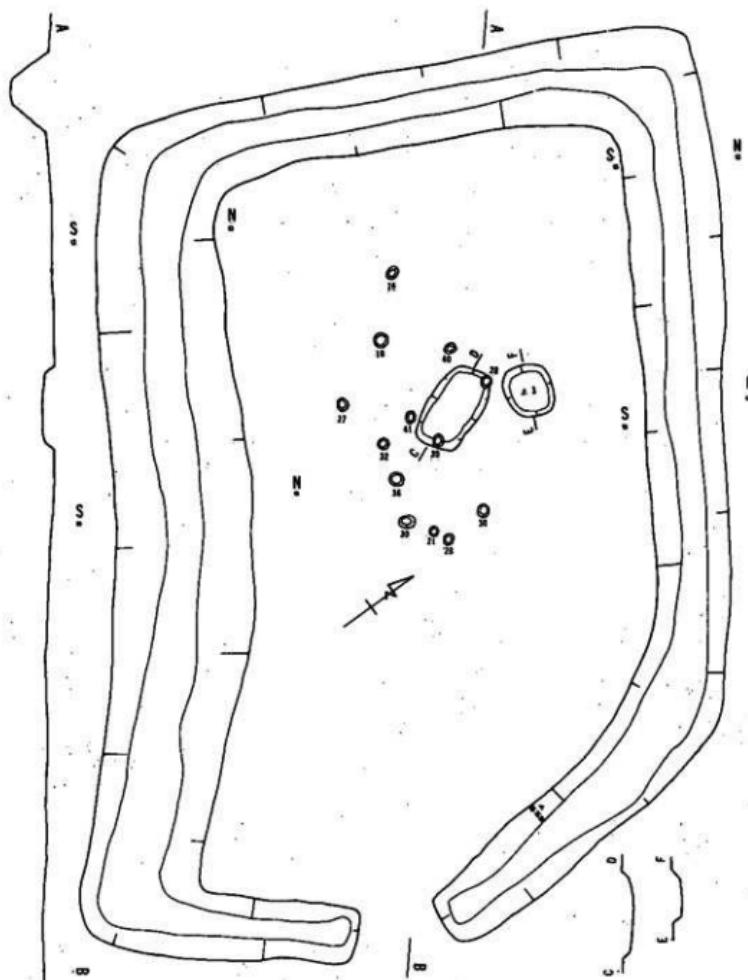


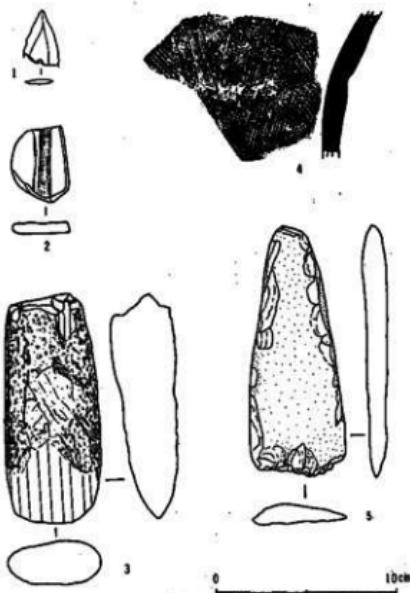
図8 酒屋前遺跡方形周溝基I



主体部・周溝は暗黄褐色砂土に掘りこまれ
主体部は暗黒色砂土、周溝覆土は上層に黒
褐色砂利混り砂土があり、暗黒色砂土・暗
褐色砂土・暗褐色粘質土があり、所によっ
て砂利混り黄白色砂土、白砂等が部分的に
入りこんでいる。

遺物(図9の1・2) 主体部上層と周
辺より弥生後期の小土器片が出土している
が、小片のため、時期は決めがたい。時期
をはっきりするものは1の磨製石鎌のみで
ある。周溝北東コーナー内側壁について出
土し、珪質頁岩製で基部を欠いている。2は小
形砥石であり、両面を磨き、表面には浅い
磨き溝をもち、側面は磨かれており、その
用途ははっきりしない。材質はシルト岩。

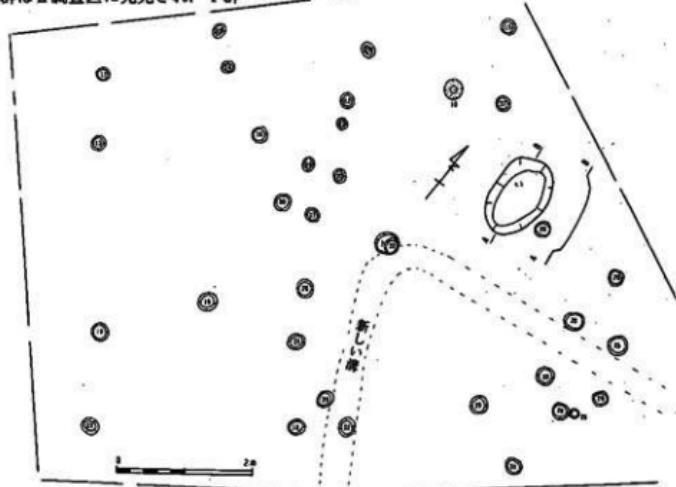
出土遺物で、方形周溝墓構築は磨製石鎌
と中央道調査出土遺物からみて弥生後期座
光寺原式の時期とみた。



1. 柱穴群

柱穴群はI~VII群に分けてみたが、IV~
VII群についてはなお検討を要する。

I・II群はII調査区に発見され、I群



(図5)は1号住居址にかかっており、1柱穴を調査しているが、用地外の南の水田にのびているとみられる。遺物は山茶碗の小片をみたのみである。

II群(図10)は南と東側は用地境の土盛のために調査不能となつたが30余の柱穴が検出され、北側は排水暗渠が掘りこまれ破壊されており、北に柱穴群のはびていたものとみられた。遺物には山茶碗・大平鉢・天目茶碗片の出土をみている。

III群(図11) 方形周溝墓の南側にあり、34この柱穴を検出し、南側と東側は旧流路の痕跡となっており、西側上段の水田は未調査に終わり、西に続くかは不明であった。北側は、方形周溝墓の調査を先行しそのため柱穴を見落したものがあるとみられ、主体部周辺にも11この柱穴が検出され、連続するものと推定される。出土遺物には天目茶碗・皿・スリ鉢等中世後半とみるものがある。

i 1列グリッドには近世陶片と寛永通宝の出土をみ江戸時代の家があったとみられるが、不明であった。

IV～VI群(図12・13・14)はI調査区の北側に東西方向に並ぶ大柱穴群で、300こに及ぶ柱穴があり、どこに線を引くか、建物址かと検討するが、整った線を引くこともむずかしい。柱穴群VIの北西端部に110cm×110cmの隅丸方形、深さ10cm余の焼土をもつ掘りこみがあり、形態からみて囲炉裏址とみられるがある。その北側は現用水路となり、建物址とみるには不十分な柱穴の並びであり、検討を要するものである。

柱穴群の遺物(図15) 出土遺物は少なく、柱穴群IV～VIの遺物(図15の1～5)の1は青磁輪花碗で口径14.8cm、推定高さ6.7cm、底部は1.3cmと厚い。2は青磁小形碗、口径9.7cmである。ともに良質な青磁で南京産とみられる。4・5は大平鉢、4は口径26.7cm、口縁端部に深い1本の沈線が引かれ、5はロクロひき上げ時の凹凸が大きく残り、高台の断面は三角形をなす。とともに珪石

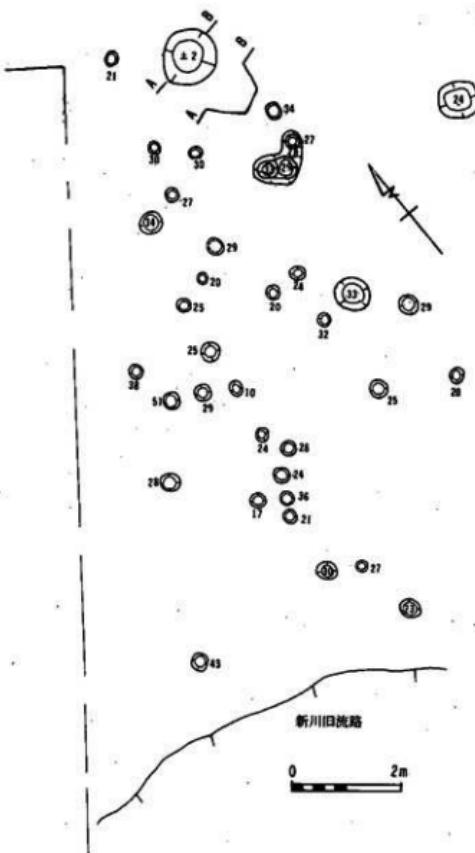
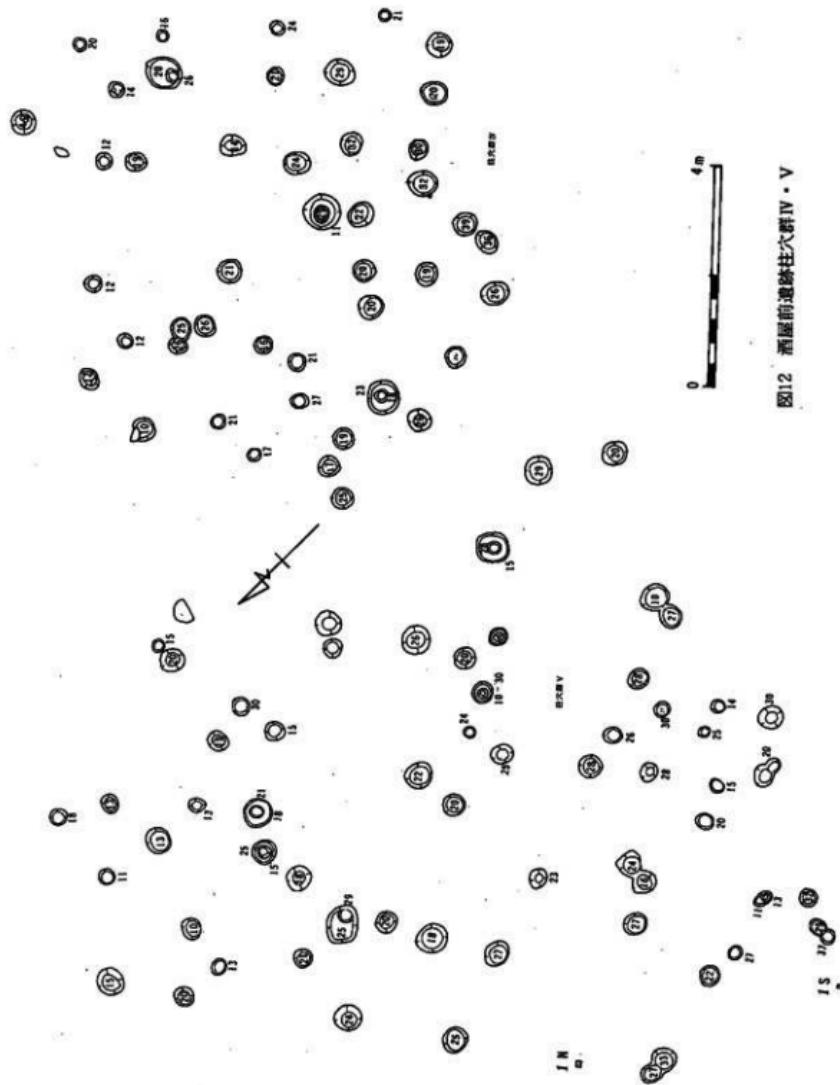


図11 酒屋前遺跡柱穴群III、土坑2号

图12 酒屋前遗迹柱穴群IV·V



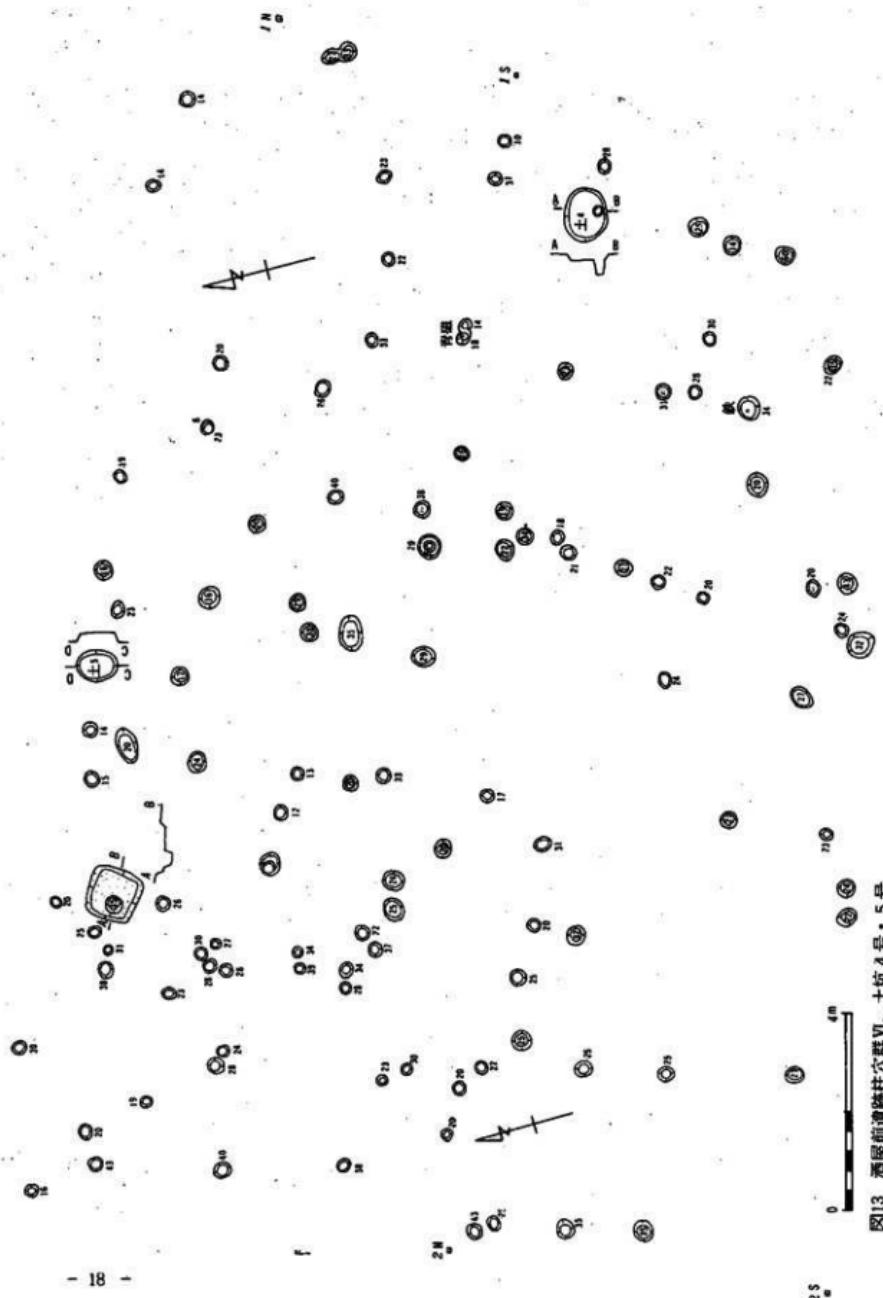


图13 酒屋前遺跡柱穴群VI. 土坑4号・5号

粒と長石粒を含む砂目胎土で、中津川窯とみられ、窯洞 - I 期とみる。図示以外に中津川窯産の大盤片があり、山茶碗の小片、内耳土器片数点の出土をみ、鎌倉時代後半に位置づくものである。3の天目茶碗は柱穴群をはずれた北西端グリッドに発見され、口径 12.5 cm、鉄輪の胎色を呈し、中世後半のものとみられる。

柱穴群 I・II よりは山茶碗・青磁の小片の出土をみたにすぎない。

柱穴群 III (図15の 6~10) の遺物 6・7の碗、8の皿は鉄輪胎色を呈す。9のスリ鉢は外面に鉄泥輪を施すもので、いずれも中世後半とみる。10は小形磁石の破片である。図示外に山茶碗の小片をみている。

4. 土坑・溝址

土坑 6 基と、土坑 6 号に付属するとみる溝址 1 があり、これを表 1 にした。

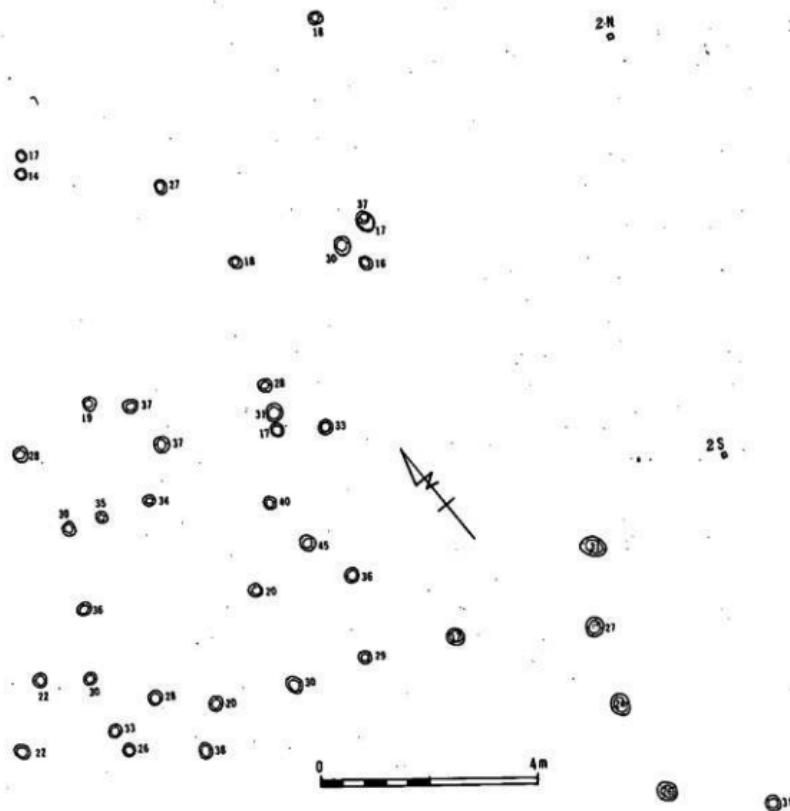


図14 酒屋前遺跡柱穴群VI

酒屋前遺跡土坑・溝址一覧表(表1)

土坑・溝址No	位 置	大きさ(cm) 南北・東西	深さ cm	形 状	主軸方向	遺物	備 考	時 期
1	II区南東端、柱穴群IIにいる	120・80	18	楕円形	N 2°W	なし		中世?
2	柱穴群IIIの北端	100・98	56	円 形	N 46°E	"		"
3	方形周溝墓Iの主体部北に隣接	102・118	19	隅丸方形	N 70°W	"	方形周溝墓 主体部の1つか	不 明
4	柱穴群VとVIの中間	80・110	9	楕円形	N 74°W	"	内部に柱穴1つ	"
5	柱穴群VIの北端部	86・54	15	"	N 5°E	"		中世?
6	柱穴群VIの南側	170・220	65	"	N 60°W	"	東側に溝がつき特殊遺構とみる	不 明
溝址 1	土坑6号に続き東西方向にのびる	長さ7.5m 幅50~70cm	15cm 前後		N 28°W	"	東にいくに従い細くなり消える。性格不明	不 明

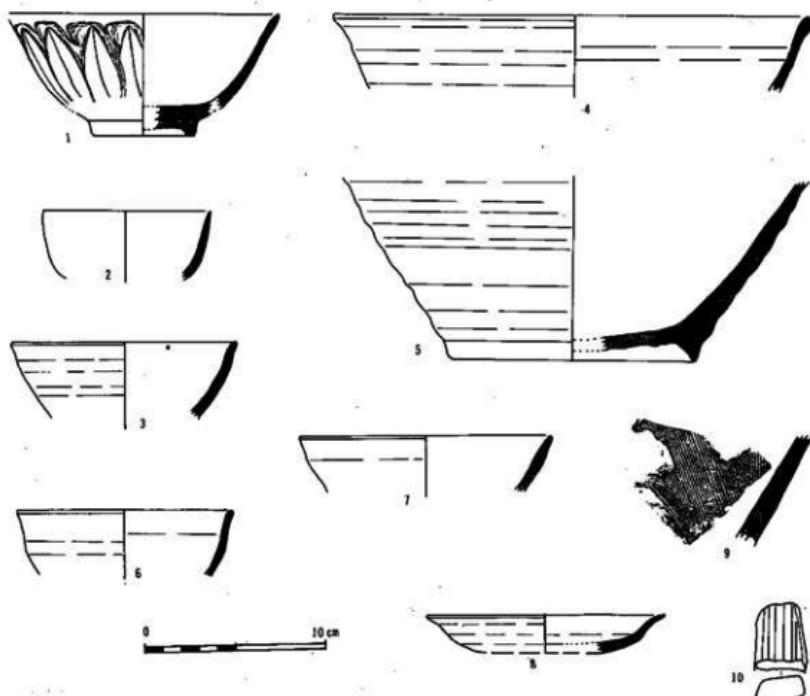


図15 酒屋前遺跡出土中世遺物(1:3)

1~5……柱穴群IV~VI出土 6~10柱穴群VII出土

5. 遺構外遺物(図9の3~5)

柱穴群IV~VIにかけて縄文中期・後期の土器小片が多くみられ、柱穴群IIIにも出土をみている。4は柱穴群IVより出土した縄文中期後半の土器片であり、5の打石斧はo-25グリッド出土で砾灰岩製、重量145g、縄文中期につく石器とみる。3は方形周溝墓南溝の南側にみられた黒土の落ちこみより出土した。最初住居址3号とみて調査を進めたが、氾濫のために削られ住居址の痕跡は認められなかった。角閃石岩で重量400g、側面は敲打形成がなされ局部磨製石斧であり、縄文後期にみられる石器である。無文の縄文後期土器の出土からみて、この期の遺構の存在したことが予想される。弥生後期土器の無文の小片は柱穴群の下層部に数点がみられ、遺構は氾濫の影響を受けているものと予想された。

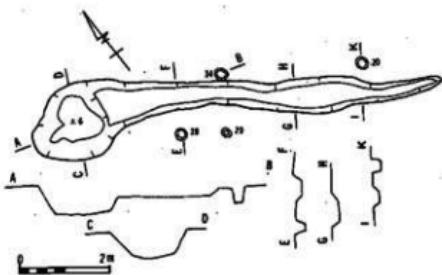


図16 酒屋前遺跡土坑6号、溝址

IV まとめ

酒屋前遺跡及びその周の大東・滝沢井尻・小垣外・辻垣外と続く遺跡では、中央道遺跡発掘調査においては、縄文時代前・中・後期、弥生後期、平安時代、中世にわたっての遺構群が調査され、多くの遺物の出土をみている。特に酒屋前・滝沢井尻出土の弥生後期の遺物は飯田地方における主要なものとして注目されている。^(注1)

今次、酒屋前遺跡発掘調査は、中央道路線の東側の舌状台地で地形的にみて、中央道用地内調査に引続き弥生後期遺構の存在に期待がもたれた。

発掘調査によって台地中央部を西から南東にかけては、新川の旧流路または氾濫流路となっていた。Ⅲ調査区を除いて氾濫堆積となり、南西の高所と、I 25グリッドに僅かローム層がみられたにすぎない。土層をみると耕土下には、黒色土・暗褐色土・砂利混り黒褐色砂土・砂利混り暗褐色砂土・暗黑色砂土等が上下に入りこみ、グリッドごとに異なる。それらの下に暗黄褐色砂土となり、ここに遺構は掘りこまれていた。弥生後期住居址・柱穴群の覆土は暗黑色砂土、方形周溝墓溝の1部と平安時代住居址覆土は堅い砂利混り黒褐色砂土で埋まる。この下層は僅かな色の変化をもつ砂層が数段あって白砂となり、最下層は黒い泥の堆積があり、地表下2mで砾層となる。

複雑な土層のため調査には苦労させられた。堅い砂利混り黒褐色砂土に埋る住居址の存在からみて見落しの遺構のあったものとも思われる。旧流路を示す区域には遺構の発見はなく、氾濫堆積の状況からみると数次にわたるとみられ、平安時代後半・中世以後によるものとみられる。このため発見された遺構はⅡ調査区の中央部、Ⅰ調査区の東端中央部と、北側に東西方向に集中している。

弥生後期住居址は用地内の南端部に発見されており、遺物は小片のみであり、その期を決めがたい。住居址の形態、周辺の遺物からみて、弥生後期とみた。用地外の南から南西の新川に面する緩い傾斜面に集落の展開が予想される。また氾濫流路区域にあった遺構の流失も考えられる。

方形周溝墓は東端中央部にあり、その規模は大きい。遺物のはっきりしたものは磨製石器の1点であり、弥生後期の土器片が僅かにみられ、弥生後期であることはまちがいない。北西方向にある鉄剣2口の出土をみた滝沢井尻遺跡方形周溝墓との関連を、集落の両端に周溝墓を配した下伊那郡松川町の場遺跡^(注2)例にみるとことがききよう。

平安時代住居址は調査区域の東端部に発見され、黒褐色砂利混り砂土を覆土にもち、杯の発見によって住居址の存在を知ったものであり、見落しの遺構もあったものと思われる。平安時代集落は調査区域外の東の台地端部にかけての存在が予想される。

中世柱穴群は新川旧流路または氾濫流路を除く大半の区域に発見され、柱穴数は400近くとなる。数次にわたる建替の建物址とみるものであるが、整った配置ではなく、その性格は今後の検討課題である。

出土遺物をみると、山茶碗・甕は中津川窯産である。大平鉢は外面胴部はロクロ引き上げ時の凹凸が大きく残り、口縁端部に1条の弦線が引かれ、胎土は長石粒を含む砂目粘土である。美濃窯洞-I期に類似

をみるもので鎌倉時代後半に位置づく。大腹片は鎌倉時代末から室町初頭のものである。青磁は良質な南宋産とみる。施釉の天目茶碗・平碗・皿は室町時代後半とみられ、鎌倉時代後半から鎌倉時代末を主にした遺構群であることが注目され、中世後半の遺構がみられてくることの歴史的背景は考慮される。

中央道遺跡調査によって発見された周辺の遺構遺物の多くも、時期を同じくするものといえよう。鎌倉時代伊賀庄地頭は北条時政であり、時政以後北条江馬氏が代々それを継いでいる。江馬氏の地頭代四条金吾は殿岡に居を構えたことは「日連聖人御遺文」によって明らかである。伊賀良地区内にのる当時の地名は殿岡と中村がある。「とのおか」が現殿岡か、その位置ははっきりしていない。大規模な中世遺構群と鎌倉時代後半から末期にわたる遺物からみて、四条金吾居住の「とのおか」の地との関連が考慮され、今後の研究課題である。

北条氏滅亡後、伊賀良庄は信濃守護職小笠原氏の支配地となった。小笠原氏は配下の武将を伊賀良の要所に置き、桜山城跡、下ノ城城跡がある。これらが築かれた時期は中世動乱期になってからであり、酒屋前及び周辺遺跡の中世後半の遺構・遺物との関連も注目すべきであろう。

今次酒屋前発掘調査は初めの弥生後期に寄せた期待に反し、成果は少なかった。その一方、中世前半の遺構群と遺物は飯田地方におけるこの期について解決をせまられる多くの問題を残した点は大きな意義をもつものといえよう。

注1 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田地内その2 昭和47年度

注2 松川町教委 的場 1973.3

おわりに、本次調査にあたって示された関係各方面的御理解・御好意があったこと、12月下旬から1月後半にわたる不順な天候と寒さの中で、熱心に作業にあたられた方々の御骨折りに深謝したい。

(佐藤 鮎信)

図版 I 遺跡



西から



南西から



南から



東から



東北東から

図版II 調査グリッド



西からみる



東からみる

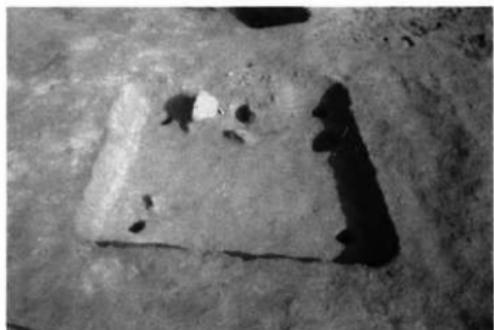


北からみる

図版Ⅲ 遺構・遺物



1号住居址・柱穴群Ⅰの1部



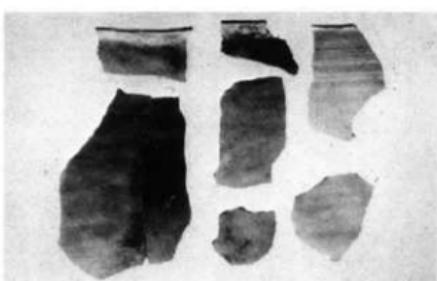
2号住居址



2号住居址杯の出土



2号住居址出土須恵器杯



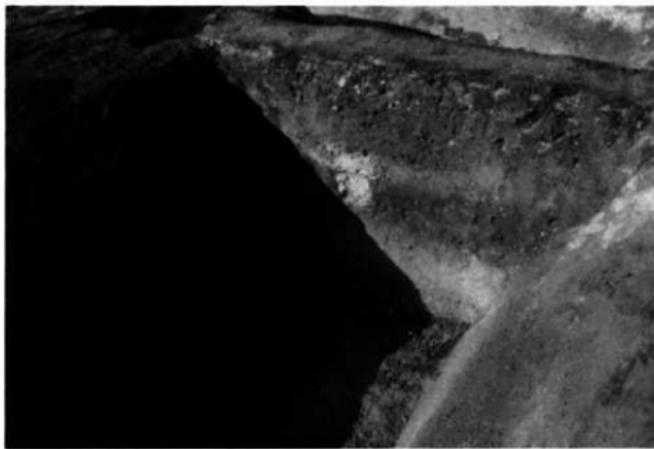
2号住居址出土土師器甕片



方形周溝墓 1号 — 東から



方形周溝墓 1号 — 西から



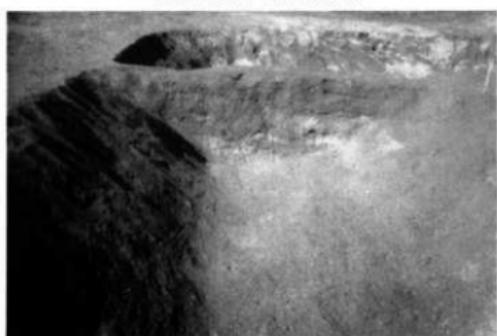
方形周溝墓1号北溝西断面



方形周溝墓1号南溝中央断面

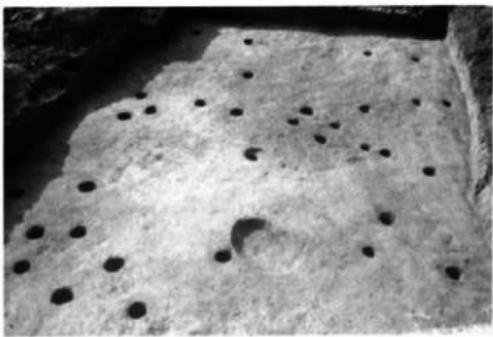


方形周溝墓1号北溝
東コーナー出土磨製石鏟

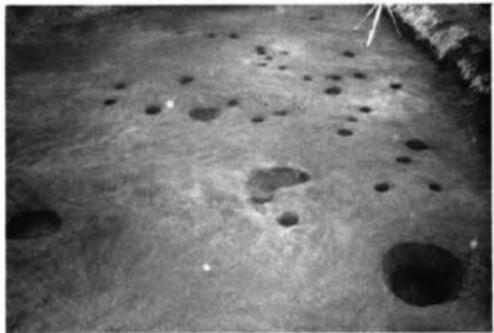


方形周溝墓1号南溝西断面

柱穴群Ⅱ。土坑1号



柱穴群Ⅲ。土坑2号 一 北より



柱穴群Ⅲ。方形周溝基1号・2号住居址 一南より





柱穴群IV～VI号 一 東から



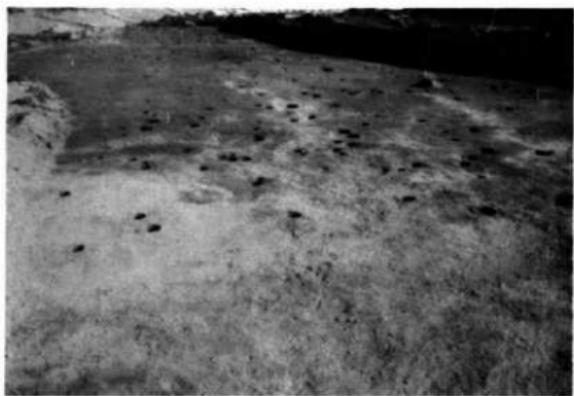
柱穴群IV～VI号 一 西から



柱穴群IV・V号 — 東から



柱穴群IV・V号 — 西から。手前は土坑4号



柱穴群IV～VII全景 — 西から

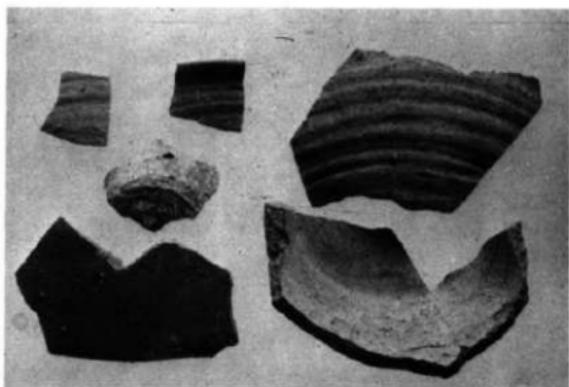


柱穴群VII・土坑6号と溝地1号
— 西から

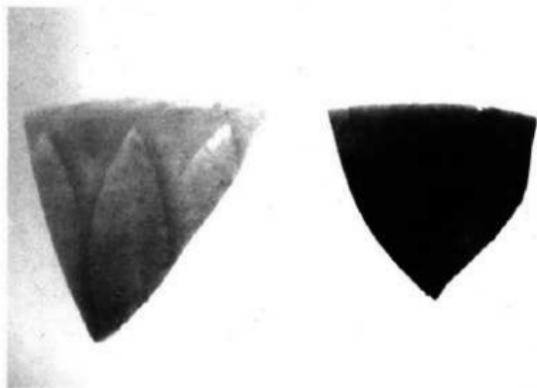


柱穴群VII・土坑6号と溝地1号
— 東から

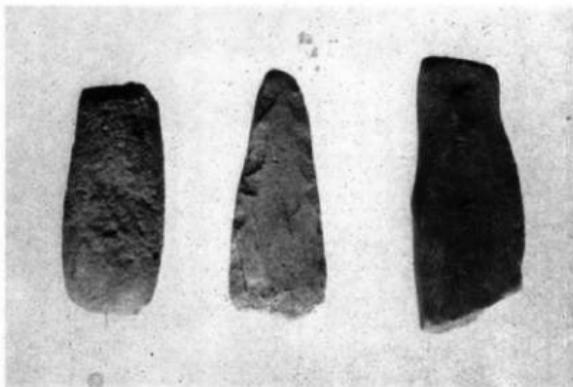
柱穴群出土中世前半の遺物



柱穴群出土青磁輪花碗（左）と
天目茶碗片（右）



柱穴群出土縄文時代石器（左・中）
2号住居址出土磁石（右）



図版IV 発掘スナップ



グリッド調査にかかる



重機による盛土排除



重機排土後の遺構検出作業



柱穴群の調査



方形周溝基周溝調査



方形周溝基周溝調査

調査組織

1. 酒屋前遺跡埋蔵文化財調査委員会

佐藤 邦信 日本考古学協会員
林 研二 飯田市教育委員会教育長
小林 三郎 飯田市經濟部長
福井 実 飯田市教育委員会教育次長
吉川 幸二 飯田市工業課長
竹村 宗丘 飯田市教育委員会社会教育課長

2. 調査団

団長 佐藤 邦信
調査員 牧内 住子

3. 指導

長野県教育委員会文化課

4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課
竹村 宗丘 社会教育課長
池田 明人 " 文化係長
小林 正春 " 文化係
前澤 潤一郎 経済部工業課振興係長

5. 作業員

福島 明夫	北村 重実	柳沢 八重子	森 章
下平 幸江	竹中 寿夫	木下辰雄	大島 利男
三輪 己秋	牧内 東江	開島 久美	高田 久子
吉沢 文三	落合 節子	古川 隆司	久保田 正勝
牧内 八代	下平 米一	柘植 勝次	熊谷 よし子
唐沢 里美	吉沢 徳男	今村 式武	他
遺物整理・製図	佐藤 いなゑ	田口 さなゑ	

お わ り に

伊賀良大瀬木地区への工場建設計画が具体化する中で、その場所が埋蔵文化財包蔵地酒屋前遺跡および大東遺跡の一画にあたることが判明し、今回の調査地に関する遺跡名は、酒屋前遺跡で統一することとした。

酒屋前遺跡は、昭和47年の中央道建設に先立つ発掘調査により数々の貴重な資料が発見されているため、今回もかなり大規模な発掘調査を実施しなければならないことが予想された。

工事計画が具体的になった段階で県教育委員会文化課、市工業課、調査担当予定者、市教委社会教育課による現地調査及び協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することにした。

県教委文化課からは、面積がかなり広範囲であり、隣接する既調査地の状況から考え、相当の期間及び経費のかかる発掘調査になるだろうが、状況に応じた調査を実施する旨のご指導をいただいた。

発掘調査実施にあたっては、佐藤勉信先生を調査團長にお願いした。

調査は当初グリット掘りによる遺構確認作業の後、何ヶ所か重点地区を設け順次拡張し遺構の検出に努めたが、当初の予想より、遺構・遺物の発見量は少く、比較的短期間に作業終了することができた。

広範囲かつ冬期の悪条件の下で、今回の調査が短期間で円滑に終了できたのは、佐藤調査團長の長年の経験による判断力と、調査に参加された皆さんの献身的な努力によるものです。

また、発掘調査終了後の整理作業についても佐藤調査團長が終始熱意をもってとりくまれ、ここに調査報告書を刊行することができましたことに対し深く敬意を表します。

昭和 58 年 3 月

飯田市教育委員会

酒 屋 前 遺 跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 1983. 3 -

長 野 県 飯 田 市

印刷 株式会社 秀 文 社